

広島、長崎への原爆投下

平成23年9月3日 高根台公民館

広島にとつて運命の日、昭和二十年八月六日は朝から快晴、澄み切った空には真夏の陽光が輝いていました。今年もそうですが、この年も台風の当たり年で、八月だけでも八個発生し、そのうち五個が本土に上陸または接近、広島も四日までは、硫黄島南方洋上に発生した台風八号の影響で雨模様だったのです。台風が朝鮮半島へ抜けた五日から天候は回復し、それまで異様に低かった気温も真夏の暑さに戻っていました。月曜の朝の八時十五分は、ちょうど通勤の時間帯です。広島駅や市電、市バスの停留所には人々の行列が出来ていましたし、街頭ではもう勤労動員の学生や国民義勇隊による、建物強制疎開の取り壊し作業も始まっていました。ほとんどがワイシャツ姿、みんな袖をまぐり上げていました。原子爆弾は、まさにこの時間に炸裂したのです。

広島は、本土決戦に備えて西日本の陸軍を統括する第二総軍司令部をはじめ、第五師団、中国軍管区司令部のある軍都です。市南部の宇品港からは、日清、日露戦争以来、外征軍はみんなここから出ていったものでした。それなのに三月、四月に少数機の空襲があつただけで、死傷者もわずか十数人しか出ていません。日本の主要都市は大半が焼け野原になり、軍港のある呉市も六月から七月にかけての空襲で、壊滅状態になつていきました。三十三万六千の広島市民は、なぜ広島が爆撃されないのか、不思議に思つていましたし、反面、いつやられるのかと、不安な気持ちでいっぱいだつたと言います。

六日の朝、中国軍管区司令部は、「豊後水道を敵大型機三機北上中」。この情報に基づき午前七時九分、警戒警報を発令しましたが、間もなく播磨灘方面に去つたので三十一分に解除していました。ところが八時六分、広島東方八十キロにある防空監視哨が、西に進んでいるB29二機を発見したのです。軍管区司令部がこの報告を受けたのは八時十一分、空襲警報は間に合いませんでした。ですから広島市民は、一万㍍の高空に現われたB29をほとんど気にもとめませんでしたし、防空壕に避難する者もなく、全くの不意打ちになつてしまつたのです。

目撃者の話では、B29が二機編隊で進入して来て、午前八時十五分、高度九千㍍から投下された原爆は、五十秒後に市中心部の大手町一丁目付近、高度五百八十㍍で爆発しました。投弾と同時に、二機は急角度で左右に別れ、被爆を避けるためでしよう。高度を下げて、全速力で爆心から遠ざかっています。投弾したの一機だけで、他の一機からはほぼ同時に落下傘三個が投下されましたが、海軍

の調査団が回収して調べたところ、気圧測定器で、電波発信装置もついていて、気圧の変化に応じてコンデンサーの容量が変化し、発信電波が変わらようになつていたそうです。米軍は遠い基地にいながら、気圧の変化曲線で原爆破裂による気圧の変化まで測定していたわけです。

約二トンのウラニウム二三五によつて、直径百メートル、表面温度実に一萬度という巨 大な火の球から、閃光、爆風、そして放射能が、一瞬のうちに人々を襲つたので す。TNT火薬にして二万トンに相当する工ネルギーに、広島市内は押し潰され、 各所で火災が発生して火災嵐を巻き起きました。当初は風速五メートルほどだつたの が、二、三時間後には四十メートルから五十メートルに達し、灼熱地獄になつていきました。 キノコ雲が高さ一万五千メートルまで上昇し、油のような黒い雨がどこからともなく降 つてきて、着ているワイシャツなどに黒い斑点を作りました。原爆のチリで出来 たキノコ雲が、凝縮して雨となつたのです。そして、この雨に打たれた人たちが 原爆症を発病し、広島生まれの作家井伏鱒二の名作「黒い雨」を生むことになり ます。焼け残つた小学校、公園、川つぶらなどには、自然と負傷者が集まつて來 て、臨時の救護所となりましたが、市内に三百人いたお医者さんのうち六十人が 即死、医療活動に当たることが出来たのは三十人ほどだつたと言われます。次々 と押し掛け来る負傷者に、とても救護の手が回らず、辛うじて歩ける被爆者た ちは、ただ郊外へ郊外へと逃れて行つたのです。

中国新聞社のカメラマン松重美人は、爆心から二・七キロほど南東の自宅で被爆 しましたが、崩れて部屋一面に盛り上がつた壁土の中からカメラを掘り出し、予 備フィルム一本を持つて家を出ました。まず社へ行こうとしたのですが、市役所 一帯は火の海、巨大な炎がうなりを立て、竜巻となつて前へ進めません。死臭の 漂う静けさ、それを切り裂く怒号と絶叫、人々と横たわる死体、人々が幽鬼のよ うにさまよつていたと言います。御幸橋に引き返すと、そこには猛火を逃れて來 た負傷者が群れをなしていました。派出所の前では、二人の警察官が食用油を塗 つて応急手当てをしています。路上から橋の上は、断末魔の負傷者でびつしり。

「よし、ここで撮ろう」。首にかけていたカメラに手をかけましたが、地獄のよ うな光景に、シャッターを切る指が動きません。やつとの思いでシャッターを切 り、十歩ほど近付いて二枚目を撮りましたが、「頬に涙が流れ、ファインダーの 画面がうるんでいたのが、今も私の脳裏から消えない」。松重は、その手記「カ メラマンの証言」に、こう書いています。

三菱長崎造船所に勤務していた山口彌は、広島造船所に出張中でした。かすか に、かなりの高度と思われる敵機のエンジンの音を聞いたかと思うと、中空にマ グネシュームの巨大な塊が爆発する瞬時の閃光と熱線を感じて、思わず大地に身 を伏せたと言います。しばらく気を失つていましたが、恐る恐る空を見ると、キ ノコ状の雲がむくむく盛り上がり、拡がり、湧きかえつては、赤、黄、青、紫、

黒など、パレットの上の絵具をそのままナイフでまぜ合わせたような、不思議な色彩の乱舞が繰り広げられました。山口は手記「原爆ゆるすまじ」の中で、「恐怖とも感動ともつかない恍惚境の中で、私は天国とも地獄とも思える壮大な神秘の世界にわれを忘れていた」と書いています。山口はその時、急にまくり上げたワイシャツの左肘先から手の先が、ゆで上げのタコのように真っ赤になつているのに気が付いたのです。同時に針で突き刺すような耐えがたい痛みと、悪寒を感じました。喉はカラカラで、その喉から後頭部の生え際に手をやつて、初めて髪の毛の半分が燃えて、ポロポロ落ちて来るのを知つたのだそうです。

避難してくる群れに出会いましたが、大人も子供もただ黙りこくつて、無表情に黙々とうなだれたまま、無意識に足を運んでいました。山口は、中でも「小学生の幼い男女の一群を、忘れることは出来ない」と書いています。六年生位の女の子が一年位の子を背負つていて、よく見ればみんな裸です。髪の半分は燃え、背中の子の両眼はただれて塞がっています。その前をフラフラ行く少女は、幽霊のように両手を胸のあたりで折り曲げていましたが、折り曲げた両手のひらからは、肘のところで焼けた表皮がそのままダラリと、手首のところまで垂れ下がっていましたと言うのです。何とも悲惨な生き地獄のような光景ですが、山口は七日午後の汽車で長崎へ帰り、そこでまた九日に被爆するという「二重被爆」の希有な経験者になります。山口は昨年一月亡くなりましたが、イギリスBBC放送が今年の一月、コメディ番組で「世界一運が悪い男」。こう紹介したものですから、長崎市の抗議に謝罪しています。

広島生まれの作家で詩人の原民喜は、昭和二十一年にその原爆体験を小説「夏の花」に、こう書いています。「ギラギラノ破片ヤ灰白色ノ燃エガラガヒロピロトシタパンラマノヨウニアカクヤケタダレタニンゲンノ死体ノキミヨウナリズムスペチアツタコトカアリエタコトカ」。本当に広島の人にとっては、全て現実にあつたことか、またあり得たことか。その思いで、いっぱいだつたことでしょう。爆心から一・二キロの距離にあつた被爆者の死亡率はほぼ五十%、それより近い地域では八十%から百%の即死だつた、と言われています。

今度の東日本大震災による福島の原発事故で、私たちも今更ながら放射能の恐ろしさを実感しているところですが、二十五年前の一九八六年四月、チエルノブイリの原発事故では、五十歳を前にガンや心臓病で死ぬ人が後を絶ちません。先天的異常を持つて生まれて来る子供も増加しており、目に見えない放射能は、二十五年の歳月を経てもなお、被爆者の体をむしばみ続けているのです。

それは、広島、長崎の死者の数にもはつきり表われています。終戦直後の昭和二十年十一月、広島県警察部の調査では死者七万八千五百、行方不明一万三千九百八十三、重傷者九千四百二十八、軽傷者二万七千九百九十七人だったのが、厚生省が平成二年五月に発表した広島の死没者は二十万一千九百九十人です。長

崎も二十年十一月の長崎市調べでは、死者二万三千七百五十三、行方不明一千九百二十七、重軽傷四万九千九十三人でしたが、厚生省の死没者は九万三千九百六十六人に達しています。つまり、死者の数は二十九万五千九百五十六人と、四十五年の間に三倍近くに増えたわけで、この数字は今なお増え続けているのです。

第二總軍參謀の朝鮮王族李錫公陸軍中佐は、この朝、馬で出勤中に相生橋付近で被爆しました。ほとんど外傷はなく、意識もはつきりしていたのですが、翌日の七日未明に急逝しました。責任を感じたお付き武官の吉成弘陸軍中佐が、追い腹を切つて殉死していますが、このように大丈夫だと思つていると、突然亡くなる人が続出したのです。

新劇俳優の丸山定夫も、移動演劇隊「さくら隊」を率いて広島入りをしていて、原爆の犠牲になっています。娯楽の少ない戦争中、内務省は国民の戦意高揚に移動演劇運動を奨励し、工場や鉱山、農山漁村を巡回公演させていました。昭和二十年に入ると、空襲の激化で列車での移動もままならなくなつたため、地方に疎開常駐させることにしたのですが、築地小劇場の第一回研究生として小山内薰の指導を受けた丸山が、広島を本拠に選んだのは、初舞台を踏んだのが広島だったからだと言われます。松江、安来、倉吉など、七月の山陰公演から戻つたばかりで、八月からは四国で移動公演をする予定になつていましたが、堀川町の宿舎は爆心からわずか五百㍍。熱線も爆風も放射能も、致命的でした。丸山と園井恵子など、宿舎で待機していた九人の隊員が犠牲になつたのです。

演出家の八田元夫は、応召した男優の穴埋め探しに上京していましたが、広島がやられたと聞いて、列車を乗り継いで九日広島に戻つて来ました。広島と呉の中間にある国民学校が臨時野戦病院になつていて、被災者名簿を探したところ、そこに丸山が収容されていることが分かり、十二日に駆け付けたのです。校舎全体に被爆者がびつしり詰められ、丸山は二階の教室にパンツ一枚で寝かされました。丸山は、自分のことを丸山の姓からでしょう。「ガン」と言つていましたが、八田が「おい、ガンさん、俺だよ」と言うと、あの気丈な丸山が「来てくれたか、來てくれたか」と泣き出しましたと言います。

とにかく熱は高いし、満足な治療薬もありません。別の劇団の仲間が宮島のお寺にいることが分かり、何かと心強いだろうとそこへ移しましたが、丸山は十五日の終戦の玉音放送を聞いて、八田に「また、芝居がやれる時期になつたんだねえ。俺、こんな体になつちやつたけれど、あと二年したら良い芝居をやるよ」。

本当に、嬉しそうに話していたんだそうです。ところが翌日の十六日、八田が他の隊員の消息を探しに広島へ戻り、夜最後の汽船で宮島に帰つて来たところ、丸山は冷たくなつっていました。もう頭の髪の毛が抜けかけていて、原爆症の初期症状が出ていたそうです。

園井恵子の場合も、そうでした。神戸に園井の小樽高等女学校の先輩で、宝塚

歌劇団時代から可愛がつてくれて、園井が「ママ、ママ」と慕つていたお宅がありました。八日の昼近く園井が飛び込んで来て、「私、助かつたのよ、助かつたのよ」。とても喜んで元気そうでしたが、やがて四十度近い高熱が出るようになり、髪の毛も抜け出して、八月二十一日に亡くなりました。

「本日、広島は敵の特殊高性能爆弾と思われるものによつて攻撃を受け、大被害を受けた」。この大本営への第一報を書いたのは、第二總軍作戦主任參謀で戦後自衛隊陸将になつた橋本正勝中佐です。司令部で煙草を一服している時、突然アメのような粘つこいものがピシヤツと首筋に叩きつけられ、目の前が黄色とも灰色ともつかない光で一杯になり、開けてあつたドアから跳ねとばされて、四つんばいになつていたそうです。何はともあれ、大本営に報告しなければなりません。通信が完全に途絶しているので、宇品の船舶司令部と呉の海軍鎮守府に伝令を出しましたが、呉からの電報が大本営に入つて来たのは六日の午後遅くになつてからでした。大本営は原爆投下と推測し、その日の夕方、情報担当の參謀本部第二部長有末精三中将を団長とする八名の調査団派遣を決定したのです。

内閣書記官長の迫水久常は、七日午前三時頃、首相官邸で仮眠している時に、同盟通信海外局長・長谷川才次の電話で叩き起こされました。サンフランシスコ放送がトルーマン大統領の声明を全世界に流し、「広島に落としたのは原子爆弾である」。そして「その破壊力はTNT火薬二万トンに相当する。我々は現在日本が有するいかなる都市、いかなる生産施設も、一層迅速かつ完全に抹殺する用意がある」。こう言つていると、いうのです。

ところが、六日の午後遅く第一報が入つてきた時、まだ何か訳の分からぬ強烈な爆弾で広島が壊滅したという段階で、「これは原爆だ」と直感した人もいたのです。内閣情報局次長の久富達夫です。東京日日新聞、現在の毎日新聞編集総務から昭和十五年十二月、第二次近衛内閣で情報局が出来た時に初代次長になり、その後NHKの専務理事を経て二十年四月、朝日新聞出身でNHK会長をしていました下村宏が国務相兼情報局総裁に就任すると、下村に請われて再び情報局次長に就任していました。久富は総裁秘書官の川本信正に、川本も読売新聞出身で、情報局に朝日、毎日、読売が勢揃いしたわけですが、言下に「あれは原子爆弾だよ、間違いない」。川本が「原子爆弾つて何ですか」と聞くと、久富は右手の拳を握つてパツと広げ、「物質の一番核になるところが原子だ。それがある力でパツと離れると、その時の凄いエネルギーが出るんだ」と説明したそうです。

川本が下村総裁の所へ行くと、国務相の左近司政三海軍中将が来ていました。二人とも和平派で、一刻も早く終戦すべきだと考えていましたが、久富から原爆のことを聞いたのでしよう。しばらく立ち話をした後、下村が机の上にあつた巻紙をとつて、筆でさらさらと書きます。左近司に「これでいね」と見せ、左近司が首肯くと、今度はその巻紙を川本の前に突き出し、「君、これを総理に届けて

くれ。居られなかつたら、秘書官に渡し、是非總理にお見せするように言つてくれ」。巻紙には達筆な躍るような大きな字で九文字、「右か左か、御決断の秋」。川本は、首相も秘書官もいなかつたため、總理室の机の真ん中にその巻紙を置いて、どこかに飛んだりしないよう文鎮で押さえて帰つて来たんだそうですが、連合国はすでに七月二十六日、日本に対する最後通告として「ボツダム宣言」を突き付けており、四月に組閣した時から心中深く終戦を決意していた鈴木貫太郎首相にとつても、まさに「決断の秋」でした。

内閣に「原子爆弾対策委員会」が設置され、総合計画局長官の池田純久陸軍中将が委員長となり、七日午前第一回会議が開かれました。情報局からは久富次長が出席し、「アメリカは大統領声明など、活発な宣伝戦を展開している。伝單など空から宣伝ピラもばらまくだろうし、国民もいろんな噂を耳にするに違いない。惨状をはつきり国民に知らせ、原爆に対する認識を十分に持たせて、国民に本当の意味での覚悟を持たせることが必要だ」。これが情報局や外務省の主張でしたが、陸軍と内務省は反対です。「原爆に対する防衛策も指示することなしに、原爆の出現を報道するのは、国民に非常な衝撃を与え戦意を失わせるから不利だ。原爆かどうかは目下調査中なのだから、少なくとも原爆だという発表は差し控えたい」。技術院も「いかにアメリカの技術が進んでいても、将来は知らず、現在はそこまで技術は進歩していない」との意見です。池田中将が「原爆でなければ何か」と反問すると、「何か特殊の装置をした新型爆弾であろう」ということで、委員会の結論は「原爆の字句は用いず、新型爆弾という表現で発表すること」に、落ち着いたのです。

七日午後の閣議も、原爆が論議の焦点になりました。東郷茂徳外相が「かかる殘虐な兵器を用いることは、毒ガスの使用を禁じている国際公法の精神に反する不当行為である。スイス公使館、万国赤十字社を通し、速やかに原爆停止すべき旨を嚴重に抗議したい」。こう提議すると、鈴木首相も「それがいい。強く抗議して下さい」と感じたので、日本政府の抗議文は十日未明、中立国のスイス経由でアメリカに発信されました。「本件爆弾は残虐性において、人類文化に対する新たなる罪状なり」という内容です。一、二の閣僚からは、恐らく下村、左近司でしょう。「ボツダム宣言を受諾すべきだ」との意見も出ましたが、陸軍大臣の阿南惟幾が強く反駁しました。「原爆と決めてかかるのは早計である。あるいは敵の謀略かも知れぬ。この際は確實に実地を調査して、方針を定めるべきだ」。この発言で、調査団の現地調査の結果を見て判断しようとなつたのです。

事実、参謀本部作戦課戦力班長の高山信武中佐の話では、陸軍の中堅クラスは「アメリカは口に正義を唱え、國際法遵守を説きながら、先般來の無差別爆撃は何たることか。まして原爆に至つては、罪なき大衆を一挙に爆碎し、三十四万人の住む都市を灰燼に帰せしめた。天罰立ち所に至ること必至である」とか、「鬼畜

米軍わが本土に上陸せば、徹底的に撃滅して仇を報ずるであろう。國民もまた一丸となり、一人一殺主義で目にものを見させてくれよう」と、いきり立っていたと言います。作戦課長の天野正一少将も「原爆には対策の方法ありとの結論で、軍の内部では原爆を大問題にした覚えはない。必勝の信念に何ら影響はない」という考えだった」。こう話していますから、政府が不確実な段階で動けば、それが「本土決戦」を叫んでいる軍部のクーデターを誘発する恐れは多分にあつたのです。

新聞発表は委員会の結論通り、公式調査による事実確認までは「原爆」という言葉は使わないことにし、大本営は七日午後三時半、こう発表したのです。「一、昨八月六日広島市は敵B29少數機の攻撃により相当の被害を生じたり　二、敵は右攻撃に新型爆弾を使用せるものの如きも詳細日下調査中なり」。大抵の場合「我が方の損害輕微なり」としてきた大本営発表でしたが、「相当の被害」を認めざるを得なかつたわけです。翌日八日付の朝日新聞朝刊は、四段トップで「広島へ敵新型爆弾」と伝えていますが、この新型爆弾が原爆ではないかという噂は、たちまちあちこちで囁かれたようです。

私も勤労動員先の工場で、情報通の英語教師が「大きな声では言えないが」と声をひそめながら、「君、あれは原爆ですよ」と言ったのをよく覚えています。作家の高見順は七日の日記に「…原子爆弾が遂に出現したというのだ。一、衝撃は強烈だつた。私はフーンと言つたきり、口がきけなかつた」。こう書いていますし、漫談家の徳川夢声に至つては六日の日記に、「本日午前八時B29三機広島二来り、恐ルベキ新型爆弾ヲ投下ス。落下傘ニツケタル、原子爆弾ノ如キモノ。死者十五万トモ二十万トモ言ウ。戦争ノ局面コレニヨリテ一転ス」。本当に六日の記入だとすれば、大変な早耳です。

理化学研究所の助手で、戦後立教大学教授になつた武谷三男は、治安維持法違反容疑で警視庁に逮捕され、喘息が激しくなつたため釈放されて自宅で監視付きの生活を送っていました。「新型爆弾」の発表に、「どうとうアメリカは原爆を作りやがつた」と思つたそうですが、八日の検事局の取り調べで、検事が新聞を取り出し、「お前が研究していたのは、この爆弾のことか」と聞きます。「そうだ」と答えると、「検事をみんな集めるから、その話をしてくれ」。武谷がウラン爆弾の説明をして、「アメリカはまだ数発は持つてゐるかも知れん。ボヤボヤしているとまた落ちてくる」。こう話すと、検事は真剣な顔になつて、「もういいから、研究室へ帰つて研究を続けてくれ」。武谷は「これには笑つてしまつた」と話していますが、広島がどんなにひどいことになつてゐるか、暗然たる思いだつたそうです。

昭和天皇は、この広島原爆をどう受け止めたのでしょうか。内大臣の木戸幸一は、六月に石渡壮太郎が宮内大臣になつてから、侍従武官長の蓮沼蕃陸軍大将、侍従長の藤田尚徳海軍大将と、毎週四人で一緒に昼食をとりながら情報交換をし

ていました。木戸は、蓮沼から広島の原爆被害を聞いて、七日の日記にこう書いています。「正午、例の通り宮相室にて会食、広島市に対して原子爆弾を米国は使用、被害甚大、死傷十三万余との報告を受く。一時半より二時五分まで、御文庫にて拝謁、時局收拾につき御宸念あり。種々御下問ありたり——」

木戸は「そんな大きな威力のある兵器をアメリカが使用し出したらなると、いくら軍人が『本土決戦だ』と力んだって、もうダメだ。こうなれば出来るだけ早く、戦争を終結しなければならない。むしろ一刻も早くだ」。そう思つて拝謁し、「原爆で日本国民がメチャクチャにされてから、戦争をやめたのでは手遅れになります。至急にことを運ばなければなりません」。天皇はすでに蓮沼武官長から報告を受けておられ、深い悲しみに沈まっていたと言います。そして「かくなる上は止むを得ぬ。余の一身はどうなろうとも一日も速やかに戦争を終結して、この惨劇を繰り返さないようにしなければならぬ」と言わられたのです。

木戸は「陛下や私があの原子爆弾によつて得た感じは、待ちに待つた終戦断行の好機を、ここに与えられた感じだつた」。天皇も木戸も、ぐずぐずしていては終戦の時機を失すると、焦慮の念に駆られていましたが、無理に断行して戦争継続派が反乱を起こせば、かえつて終戦出来なくなります。ここに土壇場に來ていた終戦の難しさがあつたわけですが、原爆の出現で、軍も國民も早く終戦しなければと思うようになるだろうし、終戦指導がやり易くなつたと考えたのです。ですから東郷外相が八日、原爆に関する米国側発表とこれに関連する事項を詳細に説明し、「いよいよこれを転機として戦争終結に決すること然るべき旨」を上奏すると、天皇も「その通りである」。そして「このような武器が使われるようになつては、もうこれ以上、戦争を続けることは出来ない。有利な条件を得ようとして、時期を逸してはならぬ。なるべく速やかに戦争を終結するよう努力せよ。このことを内大臣、鈴木首相にも伝えよ」と言われます。鈴木首相もいよいよ時期が到来したと判断し、九日に終戦へ向けて最高戦争指導会議と閣議を開くことにしたのです。

大本營から現地調査に派遣された有末中将が、所沢から飛行機で広島に入つたのは七日の夕刻でした。飛行機の上から見た広島は、「普通の爆撃された都市の跡とは全く違つていた。地上に立つてゐるものは、ほとんどない。一面にただ平つたくなつたのが特徴的であつた」と言つています。飛行場に着陸すると担当将校がやつて来ましたが、顔の半面がひどい火傷なのに、他の半面は何ともありません。その将校が言うには、「暴露したものは全て焼けますけれど、少しでも何かで蔽われていれば火傷は免れます。対策はないでもありません」。そこで夜遅く、参謀本部にとりあえずこう報告したのです。「一、特殊爆弾が使用せられてること。二、身体を被覆しておれば火傷を防ぎ得ること。三、十二日東京に此の種爆撃の噂があること」

調査団には、日本の原子力研究の第一人者で、陸軍航空本部の依頼で秘かに原爆研究にも着手していた、理化学研究所の主任研究員仁科芳雄博士も選ばれていました。飛行機がエンジンの不調で引き返したため、広島入りをしたのは八日の夕方でした。仁科は出発前、同盟通信の記者からトルーマンの声明を聞いて、「TNT二万トン」の数字は、「一二、三年前に算出した計算と一致していたので、これは本当かも知れない」と思つたそうです。そして「広島の上空へ来て旋回した時、下を見て被害の大きいのに驚いた」。被害地域が一面に広く大きいこと、さらに建物の破壊の様子などから、「私はもはや、これは原子爆弾の破壊力に基づいたものに違いない、との確信を得た」のだそうです。

内務省は八日、各都道府県に「新型爆弾」の防御法を指示しました。「必ず壕内に退避。火傷の恐れあり、壕外では露出部を少なく」と言うのですが、九日には長崎にも原爆が投下され、広島調査団は十日、仁科博士の判決として「本爆弾は普通爆薬または焼夷剤を使用せるものに非ず、原子爆弾なりと認む」。こう断定したのです。その際「消極的対策次の如し」として六項目を挙げていますが、一、警戒警報中といえども、敵機の接近を知れば掩蓋を有する屋外防空壕に避難すべし。二、防空壕に入り得ざる者は遮蔽下に入り、姿勢を低くし、閃光後急速空地に脱出すべし。三、露出部少なき服装とし、厚着をし、出来得る限り白色の下着を使用すべし。四、火傷薬は必ず持参すべし。五、防空壕に爆風除けを降すべし。六、ガラス窓は負傷の原因となるを以て直ちに撤去し、日本家屋は半地下式の壕舎に改築すべし。本当に、こんな消極的対策以外に、手の打ちようはなかつたのです。

それでも陸軍は、表面はまだまだ強気でした。陸相秘書官の林三郎大佐は「原爆の出現によって、果たして本土決戦が成り立つかどうか、内心非常に心配したが、不成立論を堂々と強調する者はいなかつた」と言つています。そして十日、全軍に対して「この種爆弾は恐るべきものではなく、我が方に対策がある」と、広島調査団の「消極的対策」を通報したのです。下村情報局総裁は、軍側がいろいろな会合で、「あれは原爆ではない」とか、「原爆であるにしても、白いシャツを着ていればいいとか、コンクリートの建物なら大丈夫だ」。こんな説明をしていふのを聞いて、「一年中、白ばかりの上着を着ていられるわけのものでもなく、コンクリートの建物だつて急造出来ないじやないか」。こう反論したんだそうですが、結局、国民には敗戦まで防御法の発表だけで、原爆投下の事実とその惨状は隠されたままでした。しかし、満足に食べるのもなく、連日連夜の空襲に打ちのめされた国民の耳、そして心は、もつと敏感でした。どの町でも、この次原爆に狙われるるのは自分たちの町ではないかと、恐怖心に取り憑かれましたし、東京では警戒警報が鳴つただけで、屋外には人影は全く見られなくなつたのです。

広島原爆の八月六日から終戦までの十日間は、戦後の日本がどうなるのか、ま

さに民族の運命がかかつてていた十日間だった。こう言つてもいいでしよう。皆さんの中にも、八月十五日正午からの「終戦」の玉音放送は、その前夜バタバタ決まつたんだと、そう思われている方が多いのではないでしようか。ところが、そうではなかつたのです。昭和天皇は、最高戦争指導会議の招集を指示された八日という早い時点で、すでにマイクを通じて、国民に呼びかけることを決意されましたのです。八月一日朝のことです。久富情報局次長が下村総裁の所へ来て、非常に真剣な顔で開口一番、「いよいよ、何とかしなければいかん」。傍にいた川本秘書官には、それが「終戦を急がねば」ということだと、すぐ分かつたそうです。下村に腰をあげて行動に移つてほしいと進言に来たのですが、久富はこう言うのです。「終戦するには、一つの形というものがある。それには、陛下に自らマイクの前に立つて放送していただく。つまり、陛下が国民にじかに終戦を宣言される。それが日本の國という建前からも、一番いい方法ではないか」

終戦への段階で、一番重要で決定的な要素は、これまで何度もお話ししましたように、「本土決戦」を叫び、徹底抗戦にたけり狂つてゐる軍部の動きでした。終戦イコール敗戦ですから、軍部は当然強く抵抗するでしようし、何が起こるか分かりません。クーデターや暴動が起これば、内閣がつぶされてしまうかも知れません。昭和天皇や鈴木首相、木戸内大臣の心配も、そこになつたのです。そこで久富が考えたのは、終戦を決めたら間髪を入れず、天皇に放送をお願いすることでした。天皇の力以外に、それも天皇の声で直接言つて頂く以外に、軍部を押さえることは出来ないと、久富は言うのです。

そうは言つても、天皇の放送ということは、戦前は容易なことではありませんでした。昭和十五年十一月十日、宮城前広場で「紀元二千六百年式典」が海外からの招待客も含め四万九千人を集めて、盛大に開かれました。近衛文麿首相が「寿詞」と言つて、天皇の治世が長く栄えるように祝う言葉を読み上げると、天皇が勅語を述べられ、東京音楽学校の生徒が奉祝歌を齊唱、近衛の「天皇陛下万歳」に全員が唱和しました。同時に三宅坂の陸軍省裏庭の大砲と、品川沖の軍艦から「皇礼砲」が轟き、全国のサイレンが鳴つて式典を終わっています。この模様は、ラジオで全国に中継放送されたのですが、実は天皇が勅語を述べられた時だけは放送は中断されたのです。天皇は神であり、そのお声が機械を通して流れるのは畏れ多いと言うのです。天皇の声、「玉音」を耳にしたのは、式典の参列者だけでした。

久富は、その難しいことを、下村の力で実現させてほしい、と言うのです。下村も即座に「それはいい、その方向へ持つて行こう」と賛成し、「ど放送のことは、私が直接陛下にお目にかかるてお願ひしよう」と言います。さつそく内閣を通じて宮内省に手配しましたが、下村の拝謁は、四月に就任以来四か月になるのに、まだ一回も行なわれていませんでした。情勢が逼迫している時でもあり、い

に拡がり、連鎖反応になると言うのです。

この驚異的な実験結果は、UILヘルム研究所にいた女性科学者によつて、彼女はユダヤ人のためナチスの迫害を恐れてドイツを脱出したのですが、デンマークの世界的な物理学の権威ニールス・ボーア博士に知らされました。仁科博士も若い頃、このボーアのもとで量子学を学んだのですが、その後ドイツの核情報は途絶えてしまつたのです。カリフォルニア大学放射線研究所の所長ローレンスは「0の暁」という本に、こう書いています。「ウラニウム分裂の発見後、この分野のドイツの研究の情報が入手できなくなつた。地下活動と新しい亡命者によつてもたらされた断片的な情報から、カイザー・UILヘルム研究所の一大部門が、ウラニウムに関する強力な研究を開始しており、約二百人のドイツの最高の科学者たちが投入され、最高の優先権が与えられていることが明らかになつた。ナチスは原子爆弾の計画に従事していたのである」

ボーアは昭和十四年の新年早々、ニューヨークを訪れ、プリンストン高等研究所で科学者たちを集めて話しました。巨大なエネルギーが放出されるということは、歴史の流れを変えるような武器が、理論的に製造可能になつたことを意味します。そして、このような強大な武器が、ヒットラーという独裁者に握られるのは恐ろしいことだと、ナチスを逃れてアメリカに亡命していた科学者を刺激することになったのです。亡命学者であるイタリアのフェルミ、ハンガリーのジラードは、天然ウラニウムにはU-234、U-235、U-238の同位元素があり、その大部分はU-238で、核分裂は天然ウラニウムには極めて少量しか含まれていないU-235からのみ起きること。しかもジラードの実験で、核分裂の結果、平均二個の中性子が放出されること、つまり連鎖反応が大爆発を引き起こす可能性が確かめられました。フェルミたちは、一刻も猶予できないと、やはりドイツから亡命していた相対性理論で有名なAINシュタイン博士と相談して、ドイツが原爆を完成させる前に、アメリカで原爆開発研究に着手するよう、大統領に進言することにしたのです。

昭和十四年十月十一日、大統領の経済顧問で有力な財界人であるアレクサンダー・ザックスが、AINシュタインの大統領宛ての手紙を持ってルーズベルトを訪ねて来ました。その手紙には、原爆の製造が可能であること、一発で周囲の地域を破壊できる公算が非常に大きいこと、アメリカはウラニウム含有量の少ない鉱石を若干所有するに過ぎず、カナダとエコスロバキアに若干の良質な鉱石があるが、最も重要なウラン産地はベルギー領コンゴであること。そして「ウラニウムの原子が近い将来に、新しい重要なエネルギーになることが想像される。これによつて生じる事態のあらゆる局面に十分注意すべきであり、政府は急速に手を打つべきである」。こう結ばれていましたが、この手紙が、アメリカが原爆開発に着手するキッカケとなつたのです。ルーズベルトは、翌日再び訪ねて来たザック

スに言いました。「アレックス、君が言いたいのは、我々がナチスに爆撃されてしまうことだな」ということだろう。そして秘書を呼ぶと、「この件は直ちに取り上げ、対処すること」を命じたのです。

こうして大統領直属の機関として「ウラン委員会」が作られ、アメリカ最高の科学者たちが多数動員され、資金も政府の機密費から必要なだけ直接支出されました。ウラニウムの原鉱石は、ザックスが奔走して、間もなくコンゴから手に入れることができました。しかもカリフォルニア大学のローレンスは、昭和十六年六月、ウラニウムの核反応によりプルトニウムを初めて人工的に作ることに成功したのです。これは核分裂を起こし、U-235と同様な作用をすると、この核分裂によってウラニウムから得られる全エネルギーを約百倍増加出来ること、天然ウラニウムを用いれば恐らく百%を必要とするが、プルトニウムなら極めて少量で済むことなどが、解明されました。イギリス政府も、デンマークのボア研究所から亡命して来た二人の科学者の研究報告に基づき、原子力研究委員会を設置していました。十六年七月、アメリカ政府に、ウラニウム-235及びプルトニウム爆弾は、二年内に開発可能であること、この二つの爆弾とも飛行機で運搬できるほど小型化出来ることを、連絡してきました。

昭和十六年十二月八日、日本海軍機動部隊の真珠湾攻撃により太平洋戦争が始まりましたが、半年ほど経つた十七年六月十八日、「マンハッタン計画」と呼ばれる原爆製造計画が具体的に動き出したのです。スティムソン陸軍長官は責任者にグローブス准将を任命し、ニューメキシコ州のロス・アラモスでは、実戦に使うことのできる原爆を、理論物理学者オッペンハイマーの監督下に設計することになりました。テネシー州のオークリッジには、二つの谷間にまたがって巨大な工場が建てられ、何千という男女が働いていましたが、ここでは天然ウランに含まれる同位元素二三八と二三五を分離し、分裂しやすいU-235を取り出す作業をしました。広島に投下された原爆は、ここで製造されたものです。ワシントン州東部の雑木林にあるハンフォードの工場では、ウラニウムから化学的操作によって人口の元素プルトニウムを分離する作業が行なわれましたが、長崎に投下されたプルトニウム原爆は、ここで製造されたのです。

遠く離れた三か所の施設には、次々と緊急資金が注ぎ込まれましたが、「言わば「ドイツよりも早く」——このただけに動機づけられた「マンハッタン計画」を推進したのは、何とも皮肉なことに、ドイツ、イタリアなど枢軸国を逃れ、アメリカに新天地を求めた亡命科学者でした。その多くはユダヤ人で、ナチスの残虐さ、ドイツ科学の優秀さを知り尽くしている彼らは、ドイツが先に原爆を手にすることを恐れ、全面的に協力したのです。中性子の権威フェルミは昭和十三年、ノーベル物理学賞授賞式出席のためイタリアを出国すると、ストックホルムからそのままアメリカに亡命しました。そして十七年十二月一日、シカゴ大学の実

験用原子炉で天然ウラニウムの原子核連鎖反応に成功したのです。この成功は、二つの重要な問題を解決するもので、「マンハッタン計画」が実現へ向けて大きく一歩踏み出した瞬間でした。その第一は、核反応をゆっくり行なえば工場や艦船などの動力源として、また急激に行なえば爆弾として、それぞれ使用できることがはつきりしたことです。第二は、U-238からプルトニウムが大量に生産できることが確かめられたことでした。

ところで、ドイツを目標に開発された原爆が、どうして日本に対して使われることになったのでしょうか。ルーズベルトとイギリスのチャーチル首相は、昭和十八年八月十四日、カナダのケベックで会談し、ヨーロッパ進攻作戦を協議しましたが、その段階では、原爆は「相互の同意なくして第三者に使用しない」と決めただけでした。それが一年後、十九年九月一日の第二回ケベック会談で、ここで調印された「米英原子力協力に関する覚書」では、「原爆が完成した暁には、慎重考慮の上、これを日本に対して使用するものとす」となっていたのです。会談三か月前の六月六日、アイゼンハワー元帥率いる連合軍が、フランス大西洋岸のノルマンディーに上陸し、ドイツ軍を大陸内部に追い込んでいました。情報機関の報告でも、戦争が終わるまでにドイツが原爆を完成させる懸念は全くなく、使う相手は日本しかなく、原爆使用の対象国として日本が明記されることになつたのです。

昭和十九年九月末、ユタ州の砂漠地帯に作られた秘密基地エンドーヴァーに、世界各地の米軍基地から千五百名の将兵が集められました。原爆の実戦投下へ向けて、軍のあらゆる分野の専門家を網羅して、新たに第五百九混成部隊を編成しました。隊長にはドイツ爆撃に当たつた二十九歳のチベツ大佐が任命され、その指揮のもとに奇妙な飛行訓練が続けられました。どのB-29も球根のような形をした大きな爆弾を積んで、いつも高度九千㍍以上を飛びます。砂漠に白く描かれた直径百五十㍍の円形の目標目がけて、爆弾手が目視によりその爆弾を投下すると、直ちに六十度の角度でB-29の方向を変え、百五十六度二分の一の弧を描いて飛ぶ訓練を繰り返したのです。原爆は、落としてから爆発までに四十三秒間。その間に飛行機が十三㍍以上離れていないと、爆風と衝撃波で吹き飛ばされる恐れがあり、その退避訓練でした。

実は、ルーズベルト自身は、この頃から原爆を実戦に使うことに、疑問を持ち始めていたようなのです。九月二十二日、「マンハッタン計画」に参画していた科学研究開発局長のブッシュ博士と話し合つた際、「完成したら本当に対日戦に使用すべきか、それともテストした後は使用せずに、一つの脅威として隠し持つていた方がいいのか」。こう洩らしたというのです。ブッシュは三日後、原爆計画の責任者スティムソン陸軍長官に、「どうも自分の印象では、大統領は使わずにいて、戦後の平和維持の観みとして置いておきたい意向のようだが、そんなこ

とをしたら、ソ連もこつそり原爆を開発するだろう。そうすれば、核戦争を招く心配がある」と話したそうです。

科学者の中でも、論議が起きました。ジラード博士は「原爆が完成した後も使わずに、戦後も秘密にしておく」。イギリスに亡命していたボーア博士は、「国際管理し、原子力情報は自由に交流すべきだ」。ステイムソンがこうした科学者の意見をルーズベルトに伝えたのは、昭和二十年三月十五日ですが、ルーズベルトはヤルタ会談から帰国したばかりで、健康がすぐれず、ジョージア州のウオーム・スプリングスに休養に出かけようとしているところでした。ステイムソンは、日記にこう書いています。「二人とも、そのような破壊兵器を取り扱う責任の恐ろしさを知っていた。大統領は何べんも、この仕事をやれば、つまり使用すればアメリカも、将来恐るべき惨禍を受けることになると思うが、しかし、いまは戦争中だから、と私に語った」。ところが、ルーズベルトが一か月後の四月十二日に急死し、原爆を日本に対して使うかどうかの問題は、副大統領から大統領に昇格したトルーマンの手に委ねられることになったのです。

昭和二十年春には、二種類の核爆弾が出来上がり、防諜上あだ名がつけられました。広島に投下されるウラニウム爆弾は、長さ三十五寸、直径七十一寸と細い形をしていることから、ルーズベルト大統領を想定して「瘦せっぽち」。最終的には長さが縮められ「チビ」「リトル・ボーイ」と呼ばれます。長崎のプルトニウム爆弾の方は、長さ三十五寸、直径が一十五寸もあり、こちらはチャーチル首相に見立てて「テブ」「ファットマン」と呼んでいました。原爆投下基地には、グアム島より日本に百六十キロ近く、四本の滑走路を持つていてマリアナ諸島のテニアン島が選ばれ、第五百九混成部隊は四月末、エンドー・ヴァー基地から十五機のB29で移動して來たのです。

トルーマン新大統領の命令で、今後の原子力政策をどうするのか、その諮問機関としてステイムソン陸軍長官を委員長とする八人の特別委員会、また科学者ばかり四人の顧問団が組織され、ドイツ降伏の翌日、五月八日に第一回合同会議が開かれました。ステイムソンは「原爆を軍事に使用する面だけでなく、この新しい力の出現によって起こる全ての問題を考慮することにしたい」。こう挨拶しましたが、出来るだけ早く戦争を終わらせるべきだ、という前提で会議は始まりました。沖縄ではまだ激戦が続いており、狂信的に突っ込んで来る特攻機も不安材料であり、三回にわたった会議の議論は、日本に対して原爆を使うかどうか、の問題に絞られていました。科学顧問団からは、日本を含めた外国オブザーバーの眼前で原爆のデモンストレーションをやつたらどうか。こういった意見が出ましたが、もしも原爆が不発に終わったり、日本が代表派遣を拒否してきたらどうなるか。また、日本に原爆の威力を警告し、指定した期限内に降伏しない場合に限つて日本に原爆を投下しては。この提案に対しても、日本が連合軍の捕虜を

目標地帯に送り込んで、「さあ、やつてみろ」と挑戦して来たらどうするか、といった疑問が出されました。

この間、アメリカ統合幕僚会議は五月二十五日、九州上陸作戦を十一月一日と予定し、作戦準備を指令していましたが、原爆製造の責任者グローブス准将は、「原爆が出来たら、これを使うという以外に私は考えていなかつた」と話しています。日本本土進攻には莫大な損害が予想されていましたから、もし二十億ドルの巨費を投じた原爆を使わないとの結論が出たら、後で議会、国民からどんな非難が出るか、恐れたのでしょう。結局「ステイムソン委員会」は六月一日、全員一致で三か条の勧告を採択し、大統領に報告したのです。一、原爆は日本に対してなるべく速やかに使用されるべきである。二、原爆は日本政府に心理的衝撃を与え、無条件降伏を受諾すべきかどうか最後の決定をさせるように、一大軍事施設に対してこれを使用すべきこと。三、原爆は兵器の性質に関する事前通告なしに使用すべきである。ステイムソンは報告の中で「日本の降伏を取り付けるためには、日本を粉碎するに足る破壊力を持つているという、証拠を見せる、とてもない衝撃を加えることが必要だ、と考えた。その効果は、人命よりも何倍という米日両国の人命を救うことになるだろう」。こう書いていますが、この論理がアメリカの原爆投下の大義名分になつていくのです。

原爆の目標選定委員会は五月二日に発足しましたが、グローブス准将は選定基準として、日本人に抗戦意欲を失わせることが目的だから、最初に狙う都市は、爆発の威力を十分に擧げるに足る大きさを持つこと、軍事的性質を持つこと、また爆発の威力を確認するため、これまでに爆撃被害のなかつた都市であること。この三点を擧げ、最初に選ばれたのが小倉、広島、新潟、京都の四都市です。小倉には日本最大の軍需工場の一つがある、広島は軍隊の乗船港の一つ、新潟は日本海の重要な港の一つで、京都は日本の旧首都であり人口百万というのが、その理由でした。なぜ、首都東京が外されたのか。グローブスは、こう言つています。「マーシャル参謀総長は、満州の関東軍と本土とを切る意味で、西海岸の港湾のある都市を無視してはならない、と私に忠告した。私は、東京も目標に定めていたが、ステイムソン、元駐日大使のグルー國務次官と話し合つた結果、『皇帝を最初に破壊することは愚かなことだ。天皇は、日本の象徴以上のもので、日本の再建にはなくてはならぬものだ』と警告された」。こう言うのです。京都については、かつて京都を訪れたことのあるステイムソンが「日本の古都であり、日本人にとつては宗教的な意味でも心のふるさとだ」。こう言つて反対し、代わって長崎に入れられることになり、目標リストは最終的には広島、小倉、長崎、新潟の順になつたのです。

原爆投下に当たつては、目標に必ず命中させるため、目視爆撃が重視されました。このため好天を選んで実施すること、目視出来ない場合は原爆搭載のまま帰

投すること、時間的余裕がなく帰投できない場合にだけ、レーダー照準による投下が認められました。同時にB29の爆撃部隊には、「これらの目標は、陸軍省の特別の承認なしに攻撃してはならない」との指令が出されました。広島が爆撃されなかつたのは、そういうわけだつたのです。テニアン島の第二十一爆撃部隊司令官ルメイ少将は、原爆投下部隊を指揮することになり、原爆投下作戦は護衛機なしの単機で行なうことを決定しました。「高高度の単機飛行に対しては、日本側が偵察あるいは天候観測と判断して、特別な警戒をしなかつたからだ」と言つています。

アメリカ首脳会議は六月十八日、日本本土上陸作戦の方針を決定し、ステイムソン委員会も二十一日、「日本に対する原爆の無警告使用」を正式に決定しました。二十六日には、サンフランシスコに世界五十か国の代表が集まり国連憲章に調印したのですが、翌日の二十七日、八人の委員の一人、ラルフ・バード海軍次官は意見書を提出し、「原爆の無警告使用」に反対したのです。その内容は「ポツダム会談が終わつた時点での、密使を派遣して中国沿岸のどこかで日本代表と会見し、ソ連のやろうとしていること、つまり対日参戦の意図、そして我々が原爆を使う計画があることを知らせる。その時、日本が降伏した場合の天皇と日本の処遇について、大統領の意のあるところを伝えれば、日本が探し求めていた降伏のチャンスを与えることが出来る。このような手段をとつて失敗したとしても、我々は失うものはないし、成功すれば得るところが大である。唯一の道は試みることである。これは、人道主義の国であるアメリカの立場と、アメリカ国民のフェアプレーの精神に発するものである」。実に理路整然とした立派な意見ですが、アメリカ海軍は「封鎖と空爆で日本を降伏させることが出来、本土上陸作戦は不要だ」という意見でしたから、フォレスター海軍長官も承知しての反対だったのでしょうか。バードは意見書が容れられないと、これに抗議して七月一日、次官を辞職しています。

シカゴ大学で原爆の開発研究に当たつていたフランク教授ら七人の科学者も、ステイムソン委員会の結論を知ると、「原爆の無警告使用」に反対運動を展開しました。ワシントンに送られた意見書では、「連合国全部の公開の前で砂漠か無人の原野で実験を行い、日本に対して最後通牒の後、連合国及びアメリカ国内世論の同意を得て、日本に投下することは止むを得ない」。こうしながらも、注目されるのは、「無差別破壊の手段は、世界中の世論の支持を失い、軍備拡張競争を激化させ、原爆の管理に関する国際協定を阻害することになろう」と強調し、戦後の核開発競争を的確に指摘していることでした。しかし、原爆開発は最高の国家機密。トルーマンでさえ、副大統領時代は何も知らされていなかつたくらいですから、こうした反対がマス・メディアによつて取り上げられることはなかつたのです。

原爆は七月中旬の段階で、広島型のウラニウム爆弾が一個、長崎型のプルトニウム爆弾が二個完成していました。ウラン爆弾の方は、理論的実験で確実に爆発することができ分かつていましたから、日本に投下する前にテストの必要はありません。問題は、天然ウラニウムほんの微量しか含まれていない「三五」を分離抽出するのに、時間と金がかかり、爆弾の必要量をどれだけ確保できるかでした。それに引き替え、プルトニウムは天然には存在しないのですが、天然ウランを使った原子炉を運転することによって、どんどん人工的に作ることが出来ます。大量生産には、プルトニウムが原爆の本命でしたが、こちらの問題は連鎖反応でした。原子力本来のネズミ算式な力が、U-235の場合は確実に一が二・五になるのに、プルトニウムの方は一が一・八ぐらいにしか増えず、爆発の実験をやつて見る必要があつたのです。こうして七月十六日午前五時半、ニューメキシコ州アラモゴードの砂漠で、豪雨が降り注ぎ稻妻が閃く中、プルトニウム原爆の実験が行なわれたのです。爆発は天を焦がし、その轟音は百九十キロも離れた町でも聞こえたほどでした。「何だろう」と不審に思った住民も多かつたそうですが、機密保持のため、翌日の新聞には「弾薬庫が爆発」と小さく載つただけでした。

ボツダム会談に出席していたトルーマン大統領は、「原爆実験成功」の報告を受けると、二十四日、戦略空軍司令官カール・スペーツ中将に対し、「八月三日以降、天候が目視爆撃を許す限り、なるべく速やかに広島、小倉、新潟、長崎の一つに対し原爆を投下せよ」と命令したのです。グローブス准將は実験成功的十六日、爆弾用ウラニウム二三五の主要部分を積んだ重巡洋艦インディアナボリスをサンフランシスコから出航させました。インディアナボリスは二十六日にテニアン島に到着し、荷揚げを済ませた後、フィリピンに向かいましたが、三十日、伊号五十八潜水艦の攻撃を受け、九百人の乗組員もろとも沈没したのです。この攻撃がテニアン到着前だつたら、三個の原爆のうち一個は実験に使つてしまつたから、残る原爆は一個しかなく、少なくとも長崎の運命は変わつていたでしょう。

スペーツ中将は、原爆投下の日時決定をルメイ少将に一任していましたが、ルメイは八月二日、原爆投下作戦の実施命令を出しました。攻撃日は六日。新潟が遠過ぎるという理由で外され、小倉、長崎は近くに捕虜収容所があることから、広島を第一目標とし、小倉が第二、長崎が第三目標となつたのです。最初の原爆投下機となるチベツツ大佐のB29は、母親の名前をとつて「エノラ・ゲイ号」と命名されました。医者になるため大学で勉強していたチベツツが、パイロットになろうと決心を変えたとき、家族みんなが反対した中で、「おやんなさい」と言つてくれたのは母親だけだったからなんだそうです。

六日の日本の天気は良さそうだと分かり、午前一時三十七分、まず目標三都市の天候偵察のため、三機のB29がテニアン島を発進しました。「エノラ・ゲイ号」

が、黒く塗られたオレンジ型の「チビ」を積んで飛び立ったのは三十分後でした。天候観測機が日本に到着したとき、日の届く限り密雲に蔽われていましたが、午前七時九分に広島郊外に来ると、広島市の上空だけが直径二十キロほどの大きな穴がポツカリ開いていたのです。町の中の街路樹まで見えました。「雲量、全高度を通じ三以下。意見具申、第一目標攻撃可。」この報告に「エノラ・ゲイ号」は一路広島に進路をとり、午前八時十五分の原爆投下となつたのです。

日本の天候は、九日から五日間にわたり悪くなることが予想されました。グローブス准将は、前々から「アメリカがこの新兵器を量産していく、日本人に繰り返し原爆攻撃の恐怖を知らせるためにも、第一の爆撃に続いて、出来るだけ早く第二の爆撃を行なうべきだ」。こう主張していましたが、ボツダム会談からの帰途、大西洋上の巡洋艦オーガスタで「原爆投下成功」の電報を受け取つたトルマンも、この意見を支持して第二の原爆投下を命じたのです。

九日の第一目標は小倉で、天候観測機の報告では、小倉、長崎共に雲量十分の二です。原爆投下機は小倉に向かつたのですが、街路や建物が見えるのに、最大の目標である工場地帯は煙とモヤのため、はつきり見えません。二度、三度と旋回して目標上空に突入しましたが、「肉眼で確認出来なければ攻撃中止」を命令されており、長崎に向かうことになつたのです。穏やかな朝を迎えた長崎では、朝、空襲警報が発令されましたが、午前八時三十二分にB29一機が通り過ぎただけです。これが天候観測機だつたわけですが、間もなく警戒警報に切り替えたところ、また爆音が聞こえてきて、西部軍管区司令部は十時五十三分、再び空襲警報を発令しました。「原爆搭載機の恐れあり」と判断して、ラジオや通信機関を利用して「B29少數機、長崎方面に侵入しつつあり。全員退避せよ」。繰り返し連絡しましたが、市民にとつては肝心な、また避難には一番効き目のある「特殊爆弾投下の疑いあり」には触れなかつたのです。

原爆投下機の方は、長崎に近づくにつれ雲が増え始め、雲量は十分の九。前線が東シナ海から移動して来て、長崎市内はほとんど雲に蔽われようとしていました。とても目視爆撃どころではありませんが、プルトニウム原爆を一番近い沖縄まで持ち帰るにしても、重さが四・五トンもあつて、燃料消費量も増え、途中で海上に不時着ということになりかねません。結局午前十一時二分、レーダー照準により投下したのです。長崎は、日本のカトリックの中心地です。爆心から七百二十キロほど離れた浦上天主堂には、聖母昇天の祝日の準備のため大勢の信徒が集まつていきましたが、屋根や石の壁が崩れて、跪いていた信徒たちの上に落ち、押し潰しました。爆心のすぐ北側にある長崎刑務所でも、看守と囚人百十八人全員が死亡しています。長崎も市街地は全滅しましたが、その範囲は広島より小さく、火災嵐も起きませんでした。海に向かつて開放された盆地の地形で、原爆による被害が山地によつて局限されたためだと言われています。しかし、正午を過ぎたこ

る、浦上地区に黒い雨が降り始め、大勢の原爆症患者を出すことになるのです。

実はこの時、原爆と一緒に落下傘で投下されたラジオゾンデ、気象観測装置には、核物理学者の東大教授嵯峨根遼吉に宛てた手紙が貼り付けられていました。

「貴兄のアメリカ滞在中の科学研究の同僚三人より」と書かれた手紙には、日本の指導者に原爆の事実を確認させ、「もし、この戦争を継続すれば、日本の全ての都市が死滅してしまうという恐るべき人命の喪失を、貴兄の全力を挙げて押し止められるよう努力されるよう懇願します。科学者として我々は、見事な科学上の発見が、このような用途に利用されることを悲します。しかし、日本が直ちに降伏しない限り、原子爆弾はその威力を倍加することでしょう」。こう結ばれていきましたが、嵯峨根が昭和十年から三年間、カリフォルニア大学放射線研究所で研究した時、一緒に仕事をした三人の科学者がテニアン島に来ていて、「嵯峨根なら、広島で何が起こったか、日本の政府首脳に説明出来るだろう」とペンをとつたものでした。

しかし、アメリカにとつて、日本への原爆投下は本当に必要だったのでしょうか。トルーマン大統領をはじめアメリカの最高首脳部は、日本の国力、戦力がもう幾許もないことを知っていたはずでした。東郷外相と佐藤尚武ソ連大使との間に交わされた二十四通の外交電報の解読により、日本が終戦への機会を模索し、ソ連に斡旋を依頼していることも掴んでいたのです。バード海軍次官や多くの科学者が、原爆の「無警告使用」に反対していましたし、七月二十日にトルーマンから見解を打診されたヨーロッパの連合国総司令官アイゼンハワー元帥、戦後大統領になるアイゼンハワーも、「日本はもはや敗北同様の状況にある」と指摘し、これに追い打ちをかけるような原爆投下には、明確に反対していました。「これほど恐るべき威力を持つ新兵器を、アメリカが最初に使う国になつてはならない」と進言していたのです。

ところが、トルーマンの方は「原爆は一つの兵器であり、それを使うことに疑いを持つたことはない」と言うのです。イギリスの首相チャーチルも「米国人百万人と、その半分の英國人の生命を救つた」と語つており、アメリカ側は一貫して「原爆投下は、日本に無条件降伏を強制し、戦争を終結させることによつて、多くの人命を救えることになつたから。止むを得ないこととしてやつたのだ」。こう弁明していますが、太平洋戦争中の米軍の戦死者は全部で約二十九万人なのです。しかも十一月の九州上陸作戦までは、大規模作戦の計画はなかつたのですから、「死者百万人」という弁明論には無理があります。「ボツダム宣言」を発表したのは、七月二十六日の夜です。日本が受諾するかどうか、待つ時間的余裕はいくらでもあつたのに、原爆投下命令の方は、その二日前、二十四日に出されているのです。

トルーマンが、原爆投下を急いだ理由は何だったのか。それは間違いなく、ソ

連を睨んでのことでした。ポツダム会談が始まるまでは、トルーマンの狙いはソ連の対日参戦を急がせることでしたが、原爆を握ったことで、その必要はなくなつてしましました。それどころか、戦後の極東政策のためには、出来ればソ連参戦は避けたいし、ソ連参戦前に日本に手を挙げさせたい。そして、すでに始まりつつある米ソ冷戦に、アメリカの力を誇示し、戦後の世界政治の主導権を確保することにあつた。こう言つても、いいのではないでしようか。

広島、長崎の原爆投下には、直後から国際社会の厳しい批判が始まつていました。ロイター通信、A.P.通信は「ローマ法王庁が原爆投下に遺憾の意を表明」と伝えましたし、ワシントン・ポストは「科学者の宣告」として、「被爆地は七十年間、死の世界と化す」と報道したのです。日本のスイス公使は、こうした国際世論の動向を外務省にこう報告しています。「スイス紙は八日、「連合国側は新爆弾の人道的な所以を説かんとし、これにより将来戦争は起こり得ざるべし」と言ひ居るも、米国論の一部にさえ、米英による右製造の独占は結局、一時的なものたらざるを得ずとし居れり」と指摘、英仏の新聞も「新爆弾が一強国により独占せらるる場合には帝国主義的征服の一手段と化す」と懸念を表明している」

事実、原爆を実戦に使つたことは、戦後世界に大きな影響を与えました。その第一は、たつた一発の原爆による被害が、余りにも悲惨なことです。しかも被爆者の後遺症は、戦後六十年以上経つた今もなお続いているのです。原爆はまた、戦後の東西陣営の対立により、核攻撃に対する恐怖を生み出しました。この恐怖が核軍拡競争をもたらしましたし、原爆開発の途上、科学者たちから指摘された「どうやつて国際管理をするか」。この問題も、未だに解決されないです。

最後になりますが、日本の原爆研究はどうだったのでしょうか。実は、アメリカとは大差なく、昭和十五年四月に始まっているのです。陸軍航空技術研究所の所長で、後に航空総監兼航空本部長になる安田武雄中将が、部下に「原子爆弾の可能性について調査してみろ」と命じたのが始まりでした。安田は「日本は小さな国だ。いくら飛行機を作つてみたって、アメリカには及ばない。相手と同じようなことをやつてもダメだ。戦争に勝つためには、原爆のような特殊兵器が必要だつた」と言っています。「可能性あり」との報告で、安田は十六年四月、理化学研究所に「原爆製造に関する研究」を正式に依頼、主任研究員の仁科芳雄博士の頭文字からとつた「二号研究」がスタートしたのです。

しかし、陸軍が理研に提供した予算は約二百万円。朝鮮半島や福島県石川町でのウラン資源探索費用を含めても二千万円ほどで、アメリカが「マンハッタン計画」に投じた額の千分の一程度に過ぎなかつたと言われます。終戦四か月前の四月十三日、理研が空襲で焼失し、陸軍もまた目前に迫つた本土決戦準備に追われて、「二号研究」は自然中止の形になつてしましましたが、日本の国力で原爆を製造することなど、やはり夢物語だつたと言つていいのでしょう。仁科博士は、ア

メリカに及ばなかつた根本原因として、研究に従事し得る科学者が少數の者に限られていたこと、経費が制限されていたので、科学者の欲するような大規模の実験研究が出来なかつたこと、学理の結論を実際に具体化する工業力がなかつたこと。この三点を挙げていますが、「たとえ以上のことが解決されても、日本には肝心のウランの原料がなかつた」と話しています。